プロレタリア美術展を観る

宮本百合子

青空文庫

（一）

ほんとは一時間半もあれば充分見られるだろうと思って行ったのだ。ところが面白い。帝展なんかみたいに素通りということはとても出来ない。おしまいには鼻を押しつけるようにしても、もう見えない程暗くなって仕舞った。

今度の展覧会はビラにも印刷してある通り第三回目だ。一回二回は自分の知らないときに、種々な困難を克服して開催された。自分としては、だからはじめっから今日までの日本におけるプロレタリア美術展の発育を比較することは残念ながら出来ない。

だが、この会場に漲る活気と画題のまやかしでない現実性とは、実に興味深いものがある。第一室にある数枚の絵を見ただけで自分は感じた、——日本のプロ美術家はやっぱりうまい！　と。

世界の一般プロレタリア芸術運動は、いつでもすでに革命を経験し、社会主義社会建設期に入っているソヴェト・ロシアを先達として認めて来た。理論と技術の上で多くのものをそこから学びとったし、未来に学ぶとるだろう。しかし一九三〇年における日本のプロレタリア美術展の作品が、主題としてソヴェトにあるものとは違う、市電争議を、農民の階級闘争を捕えて来ていること、ビラ張り、集会等、労働者の日常闘争を表現していることは正しい。革命十四年目にあるソヴェト・ロシアの絵は、勝利したプロレタリアート管理の下に拡大されつつある生産を（特に五ヵ年計画によって）農業の集団化を記念碑的に表現している。白色テロルと戦いつつある日本の上野におけるプロレタリア美術展の画は、日常闘争の報告と、階級意識への熱心な呼びかけをもってる。当然そうあるべきことだ。

（二）

ところでもう一つ、総体的に興味を感じたことは、陳列されている画が一種型にはまらぬ柔軟性を持っていることだ。描き手が若い人々で、ブルジョア美術の伝統によごされてないということが一つの理由。技術の素朴さから来る瑞々しさもまた理由の一つ。もし、技術の素朴さからだけいえば、ソヴェトの若き人々の技術だって充分素朴だ。しかし、総体の印象をつかんでいう場合、画面から来る感じにこの展覧会の画から来るような柔軟性が欠けている。日本人独特の絵のうまさが、充実した内容と、新鮮で率直な表現とで、大いに楽しき未来を約束している。

勿論、そうだからといって、一つ一つの絵がみんな満点といえないのは明かだ。例えば、技術の不足からうんと人間の顔のかさなった大きな集団を扱ったものは、より少く効果的だ。又、或るスローガンをぶつけて人々の意識を階級的に燃焼させる必要のあるポスターは、材料の政治的把握不足から、ぼんやりしたものが多い。こういうものをやらせるとソヴェトの人間はうまい。この間うちモスクワの至るところ、活動写真館の壁にまでかかっていた反帝国主義戦争の暴露的ポスターや、「五カ年計画を四年で！」のポスターは材料の掴みかた、置きかた、頭がはっきりしていて、色彩的効果も素敵だった。（プロレタリア美術展では、検閲がひどくて五十三点撤

回を命ぜられた。内ポスターが十六点もある。反帝国主義戦争、産業の合理化等を主題としたポスターに大したものがなかったのは、その故かもしれないのだ。）

なかなかうまいぞと思いつつ漫画を見てゆくうちに感じた。面白いがこれ等は見たところ特に展覧会のために描かれたものらしい。展覧会でうんとデモンストレーションをやるのもよい。同時に第二回プロ美術展から第三回が開かれるまでの一年間、われ等のプロレタリア美術家は毎日の争闘を芸術活動においてどう行って来たか、例えば戦旗、ナップ、その他に掲載された時事、政治漫画を、時間順に並べて、又一年の業績を見なおさして呉れるのも決して無意味ではないだろう、と。

（三）

第三回プロレタリア美術展は出品点数二百十七。出品画家は百名を越えている。初めに書いたように、おしまいは四辺が暗くなってしまった位だから、こまかく一つ一つについていえない。

彫刻は、うまいもんだ。ここでも、ソヴェトと日本との実際運動の情勢の相違が現れていて興味深い。ソヴェトは革命を経験し、今全く建設時代だ。若い美術家は、そこで、彫刻において、赤衛兵を、ソヴェトの男女労働者を、世界プロレタリア解放運動のための闘士を大きく記念碑的に表現しようとして、技術がなかなか追いつかぬ。実際的には石や石膏をいじるより、例えば「文化と休みの公園」の広場に飾られてるような大骨板張の大労働者像、一九三〇年のメーデーに赤い広場に飾られた大群像、または示威運動の張りものみたいな非写実的な、応用美術の方が手に入ってる。日本で労働運動はそのような祝祭の張りものを求める状態にはまだなっていない。その代り、こういう小さい、しかし現実的な大いに語るところのある彫刻がつくられているのだ。

日本のプロレタリア芸術運動は、文学にしろ美術にしろ共通の困難を経験しつつある。階級闘争の激化につれて実際運動は益々縦へ縦へと細く鋭く鑿入しつつある。その前衛プロレタリアート大衆の階級的意志、実践を生のまま把握し、それを集団性ゆたかな芸術活動にうつし、プロレタリア芸術の確立に進むことは、決して楽な仕事でない。まだ多くの清算すべき分子と技術上の未熟練がある。だが、今年プロ美術展を見た人々よ！　来年を注目しろプロレタリアート解放運動における一歩の進展はきっと諸君の若い画かきをもまた一歩進めずにはいないのだ。

〔一九三〇年十二月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集　第三十巻」新日本出版社
1986（昭和61）年3月20日初版発行
初出：「東京日日新聞」
1930（昭和5）年12月3、4、5日号
入力：柴田卓治
校正：土屋隆
2007年8月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

プロレタリア美術展を観る

宮本百合子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/